

マルコ11章 「しもべたる王の入城」

1A ろばの子に乗られた入城 1-11

1B ろばの子の用意 1-6

2B 民衆の歓迎 7-11

2A 主の宮入り 12-26

1B 実を結ばないいちじくの木 12-14

2B 宮清め 15-19

3B 信仰による御力の現れ 20-26

3A 権威に逆らう者 27-33

本文

マルコによる福音書 11 章を見ていきます。私たちはついに、イエス様がエルサレムに入られるところを見ます。主がエルサレムに來られて、初めに行われたことは、民衆がこの方をメシアとして歓喜して迎え入れたことです。それから、イエス様が宮清めを行われたことです。そして、イエスご自身を主とし王とする神の国が、神を礼拝しているはずの神の家と衝突した、ガチンコになったというところを見ます。

1A ろばの子に乗られた入城 1-11

1B ろばの子の用意 1-6

1 さて、一行がエルサレムに近づき、オリーブ山のふもとのベテパゲとベタニアに來たとき、イエスはこう言って二人の弟子を遣わされた。

前回私たちは、エリコにおいてバルティマイという盲人がイエス様によって目を直していただき、そのままイエス様に従っていく姿を見ました。そしてエリコからエルサレムまでは 25 キロぐらいあります。高度は、約 1 キロも違います。こうした上り坂をあがり、その間に盗賊などが出て來るので、あの良きサマリア人の話が出てきます。そして、「オリーブ山のふもとのベテパゲとベタニアに來たとき」とあります。ベタニアのほうが先に出てきます。そこにマルタとマリア、そしてラザロの家があります。イエス様と弟子たちはおそらく、ここからエルサレムに出入りしたのではないかと思います。エルサレムから約 2.5 キロのところですが、そしてベタニアはさらにエルサレムに近づいて約 2 キロのところですが、

興味深いのは、この二つの村の名前の意味です。ベタニアは、「まだ実らないいちじくの家」という意味であり、ベテパゲは、「いちじくの家」です。「いちじく」は、イスラエルにてありふれた木ですが、それがイスラエルの象徴ともなっています。それにいちじくの実が結ばれば、神に対して実

を結んでいることを意味します。エルサレムに近づいた時に、まだ実っていないいちじくの家を意味するベタニアに着いて、それから既に実りあるいちじくの家を意味するベテパゲに着きます。そこでイエス様は、弟子たち二人を遣わされました。

2 「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気がつくでしょう。それをほどこいて、引いて来なさい。3 もしだれかが、『なぜそんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐに、またここにお返しします』と言いなさい。」
4 弟子たちは出かけて行き、表通りにある家の戸口に、子ろばがつながれているのを見つけたので、それをほどこいた。5 すると、そこに立っていた何人かが言った。「子ろばをほどこいたりして、どうするのか。」6 弟子たちが、イエスの言われたとおりに話すと、彼らは許してくれた。

イエス様は、預言者としての働きを持っておられました。預言者の多くが、前もって誰がどこにいるかを主に知らされておりました。サムエルが、サウルが自分のところにやって来ることを前もって知っていましたね。そしてもちろん、イエス様は神の御子でありますから、全てのことをご存知です。もっと驚くのは、「主がお入り用なのです。」と言えば、その持ち主はそのまま許してくれる、ということです。その持ち主は既に、イエス様は神から来られた方だと信じている弟子になっていたのかもしれませんが。あるいは少なくとも、弟子たちに一杯の水を与えようとするようなシンパであったことは確かです。次に大勢の人たちがイエス様をキリスト、メシアとしてお迎えするのですから、その空気に満ちていたのでしょう。

ここで大事なのは、「だれも乗ったことのない子ろば」に乗られるということです。誰も乗ったことのないというのは、使い古しでないろばではない、王が乗るのにふさわしいというものです。主の前へのいけにえとしても律法で登場します(民数 19:2、申命 21:3)。そして「子ろば」は、驚くべきことです。確かに、王ソロモンが即位する時にギホンの泉で、雌らばに乗ってきました。戦争を象徴する馬ではなく、驢馬や騾馬に乗ることは平和を象徴しています。

けれども、この福音書を読んでいる多くの人が、ローマにいる人々であることを考えると興味深いです。しばしばイエス様のエルサレムへの入城は、「勝利の凱旋」とも呼ばれます。しかし、ローマにおける勝利の凱旋は、武力に満ちているものでした。総督が、敵を征服した後に数多くの分捕り物と奴隷を引き連れて、ローマに戻って来ます。金で飾り物を付けた軍馬に乗り、祭司たちは香を焚き、民衆は総督の名を叫び、称賛します。その行列は、ローマの円形劇場に連れて行かれ、そこで奴隷が獣と戦うという、残虐な娯楽で終わります。それと比べたら、イエス様が、エルサレムにイスラエルの王としてお入りになる凱旋入城は、なんと質素なことでしょうか！ご自身が乗るろばの子まで、ご自身で弟子たちに言いつけて調達しなければならなかったのですし、まるで格がローマのものとは違います。

ここに、「しもべたる王」の姿を見ます。この方を王としてあがめ、従うのですが、力による征服ではなく、へりくだりと柔和さに裏付けられた支配なのだとことです。「マタ 11:29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。」そして、このしもべたる王の姿は、創世記にもゼカリヤ書にも預言されていました。「創世 49:11 彼は自分のろばの子をぶどうの木に、雌ろばの子を良いぶどうの木につなぐ。」「ゼカ 9:9 娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。」

2B 民衆の歓迎 7-11

7 それで、子ろばをイエスのところに引いて行き、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。8 すると、多くの人たちが自分たちの上着を道に敷き、ほかの人たちは葉の付いた枝を野から切って来て敷いた。9 そして、前を行く人たちも、後に続く人たちも叫んだ。「ホサナ。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。10 祝福あれ、われらの父ダビデの、来たるべき国に。ホサナ、いと高き所に。」

弟子たちが、子ろばに上着をかけました。これは、イエス様が乗るための鞍にするためです。そして、多くの人々が上着を道に敷きます。外国から首脳が来日した時に、飛行機のタラップから降りる時に、絨毯を敷きますね。それと考えは似ています、王がお通りになるところに自分の上着を敷いて、王をお迎えするのです。北イスラエルの将軍エフーが油注がれた時に、人々が彼の足元に上着を敷いています(Ⅱ列王 9:13)。

そして興味深いのは、他の人たちが葉のついた枝を切り取って敷いていることです。これがヨハネ 12 章では、棕櫚の木なので、しばしばイエス様のエルサレム入城を「棕櫚の聖日」と呼びます。詩篇 118 篇 27 節に、メシアなる王が来られる時に「枝をもって、祭りの行列を組め。」とあります。そして仮庵の祭りの時に、葉の茂った木の枝を持って、主の前で喜ぶことが命じられています(レビ 23:40)。ゼカリヤ 14 章には、主が来られると諸国の民が仮庵の祭りを守るためにエルサレムに来る話を書いてあります。いろいろなことを総合して、これはまさしく、メシアが来られて、そして神の国が立てられることを大喜びで迎えている姿なのです。

彼らの叫んでいる言葉が、まさに詩篇 118 篇 25-26 節からのものであり、メシアがエルサレムの神殿にまで来られる時に歌われるものであり、イエスが人間の預言者以上の、神のキリストであることを示しているおのです。

このような熱狂的なことが、過越の祭りが近づいている時に起こりました。そうでなくとも、過越の祭りの時は、ユダヤ人にとって熱狂する時です。世界中の離散のユダヤ人がエルサレムに集ま

り、その時の人口は三倍に膨れ上がります。民族的に高揚するので、それでローマ当局は騒動が起こらないようにするために、兵を派遣して、監視させます。総督は駐屯しているカイサリアからエルサレムに向います。熱心党员は、ローマ兵を殺すかもしれません。そういった緊張した空気も、漂います。そこに、ろばの子に乗って来られるユダヤ人を熱狂して迎え入れる群れが出てきて、ローマとしては何とも言えない、どうすればよいか分からない、不思議な熱狂が入り込んできた、ということでしょう。

そしてイエス様にとっては、これが公にご自身がメシアであることを受け入れた時です。それまでは、慎重になり、「このことを誰にも言ってはいけない」と強く戒めておられました。けれども、それは時が来るまでのことであり、今、その時が来たのです。ダニエル書 9 章には、メシアが来られて、この方が断たれる、定められた時について書いてあります。イエス様は、ご自身が確かにキリストであることを示すために、細心の注意を払っておられました。決して、臆病になっていたのでもなく、ひた隠しにしていたのでもありません。しもべたる王として、人々にご自身を明らかにするために他なりませんでした。

11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮に入られた。そして、すべてを見て回った後、すでに夕方になっていたので、十二人と一緒にベタニアに出て行かれた。

ついに、メシアが宮の中に入られました。けれども、熱狂の頂点になるところが、なっていません。ずっと昔のことですが、明治神宮球場の花火大会のチケットをいただいて、友人と二人で見に行ったことがあります。前座で中森明菜が出てきました。ファンたちが前に出てきて、熱狂します。ところが彼女がステージから出て行くと、これまで一気に引き下がりました。そんな感じだったのかな？と思います。もちろんそれは、主催者側が何らかの管理をしていたのですが、こちらではイエス様が何らかの形でその群衆の動きを支配しておられたのでしょう。イエス様はただそこを見回っただけで、夕方になったのでベタニアに十二人と共に戻られました。

2A 主の宮入り 12-26

実は、主が宮に来られる時は、それが裁きのために来られることをマラキが預言しています。「3:1 『見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。彼は、わたしの前に道を備える。』」これは、バプテスマのヨハネについての預言です。「『あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、彼が来る。——万軍の【主】は言われる。』」これが、キリストご自身についての預言です。そして、「3:2 だれが、この方の来られる日に耐えられよう。だれが、この方の現れるとき立っていられよう。まことに、この方は、精錬する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。」このようにして、主が神殿に来られる時には、裁きが行われるということを示唆した預言をマラキが行っています。

1B 実を結ばないいちじくの木 12-14

12 翌日、彼らがベタニアを出たとき、イエスは空腹を覚えられた。13 葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので、その木に何かあるかどうか見に行かれたが、そこに来てみると、葉のほかには何も見つからなかった。いちじくのなる季節ではなかったからである。14 するとイエスは、その木に向かって言われた。「今後いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように。」弟子たちはこれを聞いていた。

イエス様は祈られていたのでしょうか、翌日ベタニアを出られた時に、空腹を覚えておられます。けれども、そこに実がなかったので、それを呪っておられます。まるで自己中心的な思いで呪われたようにさえ見えます。けれども、そうではなくしっかりと意味のある、象徴的な行為として呪われています。

「いちじくのなる季節ではなかったから」とありますが、この時は3月終わりか4月初めの時期です。過越の祭りが近づいているからです。いちじくの実が結ばれるのは、6月から始まって7月、そして8月に収穫が終わります。ですから、ずっと前のことなのですが、3月に「緑の実」をいちじくは付けるのです。それは食べることができて、農夫たちがよく食べていました。そして、その緑の実は落ちて、それから今、話した6月からの食用のいちじくの実が結ばれます。もし、緑の実を結ばせていなければ、食用のいちじくの実もその年は結ばれません。ですので、イエス様が御覧になった時に、実が結ばれていなかったということは、初夏にも実が結ばれないということになります。

いちじくの木については、ぶどうの木と共に、イスラエルの国民を表している預言が多くあります。「エレ 8:13 わたしは彼らを刈り入れたい。——【主】のことば——しかし、ぶどうの木には、ぶどうがなく、いちじくの木には、いちじくがなく、葉はしおれている。わたしはそれらをそのままにしておく。」実を結ばせないいちじくの木、ぶどうの木であれば、そのまま廃れるままにさせると、主は語られていますが、まさに今、そのことをイエス様は行われたのです。それで宮清めの出来事です。

2B 宮清め 15-19

15 こうして彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮に入り、その中で売り買いしている者たちを追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。16 また、だれにも、宮を通して物を運ぶことをお許しにならなかった。17 そして、人々に教えて言われた。「『わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではないか。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしてしまった。」

午前礼拝の説教をお聞きください、神の家は祈りの家と呼ばれているのに、そこを強盗の巣にしてしまったと言われた主の言葉は、聖霊の宮とされている私たちに聞かなければいけない警告の言葉です。霊的な装いがむしろ自分の罪を覆い隠すことができえるのだ、ということです。自分の

罪や心の汚れを隠すために、霊的な言葉、教会や聖書で使われている言葉を使って正当化することができます。しかし教会は、祈りの家です。神の前にへりくだり、心を注ぎだす所です。そして、神に仕えるところです。イエス様が仕える方であり、私たちがこの方を主としているなら、私たちの仕えるべきなのです。心理的であれ、肉体的であれ、ただ自分の欲求を満たすために来るのであれば、それは神からの物を盗んでいることになってしまうのです。

18 祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。群衆がみなその教えに驚嘆していたため、彼らはイエスを恐れていたのである。19 夕方になると、イエスと弟子たちは都の外に出て行った。

これまで、パリサイ派や律法学者たちが殺したいと思うことはありました。けれども、計画して、それを具体的に実行に移すことはありませんでした。しかし今ここで、殺害の計画を立て、それから実行に移そうとしています。問題は、群衆です。この群衆の心がイエス様に向けられていたので、イエスを捕らえたならば、自分たちに群衆が齒向かうのではないかと恐れたのです。真理や正義を求めるのではなく、自分たちの立っているところを守るため、自己保身のために実行に移せなっていました。それを実行に移せるようになるのは、イスカリオテのユダが後で裏切るからです。

そしてイエス様たちは、夕方になって都の外に出て行かれました。そこは捕えられる危険もありましたし、元々、エルサレムは人々でごった返していましたから、多くのユダヤ人はエルサレムの近辺の宿に泊まったり、天幕を張ったりしていました。

3B 信仰による御力の現れ 20-26

20 さて、朝早く、彼らを通りがかりにいちじくの木を見ると、それは根元から枯れていた。21 ペテロは思い出して、イエスに言った。「先生、ご覧ください。あなたがのろわれた、いちじくの木が枯れています。」

弟子たちは、イエス様が呪われた言葉を聞いていましたから、それがその通りになっていることに気づき、ペテロがそれを言い出しています。イエス様がいちじくの木を呪われたのは、先にお話ししたように、イスラエルの国がその召しにふさわしい実を結ばなかったからです。宗教的な活動という葉は、結ばせていたのです。けれども、神と自分との関係から結ばれる実を結ばせていなかったのです。覚えていますか、バプテスマのヨハネがエルサレムから来たパリサイ派やサドカイ派の者たちに対して、「マタ 3:10 斧はすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。」そして、イエス様はここで根こそぎ枯れるほどの呪いを行われました。四十年後に、この神殿はローマによって破壊されます。そして多くが殺され、また奴隷として捕え移されていきます。

22 イエスは弟子たちに答えられた。「神を信じなさい。23 まことに、あなたがたに言います。この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ』と言ひ、心の中で疑わずに、自分の言ったとおりにになると信じる者には、そのとおりになります。24 ですから、あなたがたに言います。あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。

イエス様は、イスラエルの民が裁かれることを話すのではなく、一見、無関係なことを話しておられます。イエス様にとって、弟子たちに教えられるのは僅かに与えられた時間です。あと数日後に十字架に付けられます。ですから、彼らにこのことを通して教えたいことを教えられます。ここで、イエス様は神を信じることを教えられました。いちじくの木が枯れましたが、神を信じる者には、山をも海に動かすことのできる力が与えられます。彼らはオリーブの山の辺りにいましたが、その山が海、すなわち死海や地中海に動いていくということです。興味深いことに、終わりの日に主が再臨されて、オリーブ山の上に立ちますが、その時に山が南北に別れることが書かれています。ですから、文字通りにも実現します。

けれども、ここでの山は、どうにも動かすことのできないものを形容して話しておられます。ゼカリヤ書 4 章に、山が平らになるという宣言がありますが、それは神殿建設で困難を極めていた帰還したユダヤ人たちに対する励ましの言葉でした。主がそうだと語られたことは、その通りになります。そのように見えない山みたいなものが、私たちの前に立ちはだかります。けれども、神が約束されたことはその通りになると信じて、その山が動くことを心に抱き、時に、イエス様がここで言われたように、信仰をもって宣言することもあります。そうなるのだと。ここで話しておられるのは、「自分の気持ちや思いを口で宣告したら、その通りになる」みたいなものではありません。そういった魔術的なことではありません。それは自分の勝手な思いや気持ちでしかないので、そうではなく、神の御言葉、神の御心がはっきりしていることについて、信じて祈ることなのです。

主は、「あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。」と言われます。ヨハネも第一の手紙でこう言いました。「5:14-15 何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願ひ求めたことをすでに手にしていると分かります。」これが、幻というものです。それぞれが恵みによって、必ず幻が与えられます。私たちは、例えば、西日暮里の教会に来て、地域に根差した伝道、神が人々を救う働きを祈りました。そして、私個人は、アメリカにいた 20 年以上も前、日本のビジネスマンの人たちに福音で届きたいという思いが与えられていました。そのどちらをも、主がかなえておられます。キリストが、罪人を救うために世に来られた、というのは神の御心です。ですから、その御心に徹底的に従えば、必ずキリストは救ってくださるという確信です。

25 また、祈るために立ち上がる時、だれかに対し恨んでいることがあるなら、赦しなさい。そうす

れば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの過ちを赦してくださいます。」

イエス様はペテロや他の弟子たちに、もう一つの大切な真理を教えてくださいました。私たちは信仰に満たされないといけません、赦しにも満たされないといけません。神によって赦されたのですから、私たちも他者の罪と過ちを赦さないといけません。

「祈るために立ち上がる」とありますが、祈りの姿勢について聖書では、意外に私たちの祈りの姿勢とは違う姿勢をよく示しています。ひざまずいて祈るということ、私たちはあまりしませぬ。手を上げて祈ることは、時々するでしょうか？手を組んで祈ることを私たちはよくしますが、実は、聖書には出てきません。目をつむって祈ることも、聖書には確か出てきません。要は心が大事ですから、手を組んでも組まなくても、目をつむっても開いたままでも祈ってよいです。けれども、人々の代表として祈る時に、立って祈ることがありました。

立って祈る時に、自分が恨んでいることがあるならば、赦します。祈りの中で、他の人たちを赦しているということは最優先事項の一つなのだということを知ることが必要です。私たちと神との関係の中で、赦しに基づくものでなければ、どうやって神と共に歩むことができるでしょうか？それで、赦すことを祈るのです。そうして初めて、自分が父なる神に赦されたことを確信することができ、安心することができるのです。

実を結ぶということ、祈ること、そして神を信じること、それから赦すこと。これらが無関係に列挙されているようですが、実はつながっていますね。祈りの姿勢と心があって、初めて実を結ぶことができます。神を信じなければ、どうやって祈りが聞かれると期待できるでしょうか？そして、赦すことは祈りの生活で不可欠なことです。

3A 権威に逆らう者 27-33

27 彼らは再びエルサレムに来た。イエスが宮の中を歩いておられると、祭司長たち、律法学者たち、長老たちがやって来て、28 こう言った。「何の権威によって、これらのことをしているのですか。だれがあなたに、これらのことをする権威を授けたのですか。」

ついに、対決が始まりました。イエス様をご自身をメシアとして、群衆からの歓迎を受け、そして主の宮を清め、裁きを宣言されました。そこで、神殿を管理している宗教指導者らが、イエス様にその権威はどこから来ているのか？と尋問しています。この尋問が、12章の終わりまで続きます。彼らの尋問は、律法の裏付けがあります。モーセがかつて、自分と同じような預言者が同胞の中から起こされることを預言しました。「申 18:18-20 わたしは彼らの同胞のうちから、彼らのためにあなたのような一人の預言者を起こして、彼の口にわたしのことばを授ける。彼はわたしが命じることすべてを彼らに告げる。わたしの名によって彼が告げる、わたしのことばに聞き従わない者が

あれば、わたしはその人に責任を問う。ただし、預言者であっても、わたしが告げよと命じていないことを、不遜にもわたしの名によって告げたり、あるいは、ほかの神々の名によって告げたりする者がいるなら、その預言者は死ななければならない。」ですから、彼らはイエス様を偽預言者として、死ななければならないように誘導尋問しているのです。

29 イエスは彼らに言われた。「わたしも一言尋ねましょう。それに答えなさい。そうしたら、何の権威によってこれらのことをしているのか、わたしも言いましょ。30 ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか。わたしに答えなさい。」31 すると、彼らは論じ合った。「もし、天から来たと言え、それならなぜ、ヨハネを信じなかったのかと言うだろう。32 だが、人から出たと言え——。」彼らは群衆を恐れていた。人々がみな、ヨハネは確かに預言者だと思っていたからである。33 そこで、彼らはイエスに、「分かりません」と答えた。するとイエスは彼らに言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」

イエス様の彼らへの回答は、とても知恵に満ちています。イエス様は、「そもそも、彼ら自身が事の真偽、正しさを求めていない」という問題があるのです。先に、群衆を恐れていたのがイエスを殺害する計画が実行できないことを見ましたね。自分の判断基準が、群衆にどう思われるか？ということであり、真理を求めて尋問していないのです。その偽善をイエス様は暴露されています。まず、バプテスマのヨハネの宣教について尋ねておられます。イエス様は、ヨハネの宣教と同じことを語られました。ですから、ヨハネを受け入れれば、ヨハネがこの方が来るべき方なのだとした証言も受け入れないといけません。ですから、彼らが尋問しているのですが、実は彼ら自身が尋問されているのです。

そして、彼らは群衆を恐れていたのが、「分かりません」と言っています。どちらか分からないのではなく、自分が頑なにヨハネを通しての神の真理を拒んでいるのです。その拒んでいることを、偽って分からないと言っているだけです。ならば、本気で「ヨハネは人から来ている」と堂々と言えよよかったです。それを言わない。「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」と答えなければいけないところを、分からないとお茶を濁しました。

そこでイエス様も、「あなたがたに言いません。」とされています。彼らの偽善に付き合う必要はないのです。主に仕えている時に、そういった偽善から来た言葉に付き合う必要はない、ということ。私たちはここから、宗教性、悪い意味の宗教性を知らないといけません。言葉において、知識において、霊的に装っても、偽善であれば応答する必要がありません。取り組む必要はないのです。イエス様がそうであられたように、神に仕えることに専念すればよいのです。パウロが言った言葉を最後に読みます、「ピリ 4:8 最後に、兄弟たち。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判の良いことに、また、何か徳とされることや称賛に値することがあれば、そのようなことに心を留めなさい。」